

リコー三愛グループ

三愛会会誌

No. 125/2000

市村清生誕生百年記念特集号



市村清生

SAN-AI

■市村清氏と私

永遠の「ヌーボー」です 市村清サンは……

俳 優 中 村 メ イ コ

かつて私は「メイコのごめん遊ばせ」という週に一度のTV番組を十年間ほど生放送でつづけた。たしか夜の八時台に十五分番組として放映されていた、いわゆる対談番組なのだが、芸能人はほとんど「時の話題」でもなければ出演することはなく、財界・政界・文化人がお客様で、当時のことで、うち合わせもあまりなく、前日に「明日のゲストは○○サンです。よろしく……」という感じで、このよろしくはつまり「メイコ流で御自由にどうぞ」ということらしかった。むろん皆様が有名人でいらしたからお名前をうかがえば、その頃

二十代だった私にも、だいたいどんなインタビューをすればいいかぐらいは見当がつくし、多少の失礼やハプニングやつつこみが、その頃の「メイコ流」とやらの局側のネライでもあったようだ。だが、たまにどんなお話をしたらいいのか見当のつかない相手もあって、そんな時には私はいつも、その頃はまだ若くて元気だった実家の父（作家・故中村正常）に電話でアドヴァイスを受けることにしていた。それが何よりも手っとり早い方法だったし、ユーマア作家らしくエスプリのきいた的確なチエを貸してくれたから……。

まだ番組の初期であったと思うから、昭和三十年代の終り頃だろうか……。[明日のゲストは市村清サン。とっても失礼なことだと思っけど私には、どんな方なのか……どんなお話をすればいいのか……]と切り出す私に、電話の父の声は少し笑いをふくみながら言うのだ……「年令的には、むろんキミよりずっとずっと年長者でいらつしやるが、市村サンという方は日本の財界の「ヌーボー」だよ。実に新しいユニークな存在だ。サラブレットとか伝統とかに長らく受けつがれていた日本の財界にポツと明りが見えたようなものだ



リコー三愛ビル竣工披露パーティーに出席された
中村メイコさんとご主人の神津善行氏(右)

よ。かといって、決して一獲千金的なものではない。もちろん汗と涙なみだもたくさんこぼされただろうが、決して垢あかにはまみれていない、まさしく「ヌーボー」だよ。きつと斬新なアイデアをどっさりお持ちだろう。それこそメイ

コ流で何でも質問してごらん。妙な政治家のオッサンみたいにふんぞりかえったりしない、おだやかな紳士だと思ふよ、この「ヌーボー」さんは……。」と、父は言った。マサに市村先生は終始おだやかな笑顔で「器材」を貸すのではなくて「頭脳」を貸すのだという「人間リース」の話など、当時としては画期的なことを、情熱的に私のような女性相手にも、わかりやすくお話し下さった。以来、この私の方が、すっかり市村清ファンになってしまつて、お美しく、そしていつも凜然りんぜんとしていらした奥さまともども、御夫妻には公私ともに長い長いおつきあいをさせていただくようになる……。かつての日「メイコのごめん遊ばせ」のアンバセが妙にハイソサイテイ風で私には似合わないといクレームをつけたとき、局側が「メイコちゃんも妻になり女にもなったのだから、これからはメイコさんになって仕事の上でもキッチンと「ごめん遊ばせ」ぐらい、テレないで言える女優になつて下さい。」と言つたのだと、私が、そんなことを市村先生にお話しすると……。「な

るほどネ。しかし御婦人にはいろんな言葉の表現があつていいいな……男の「ごめん遊ばせ」はなんだろう……「失敬」かな。そう、ボクもいつもキッチンと「失敬」と言つて、かるく頭を下げるのがサマになる男でいたいものだナ……。」とおっしゃつたことが、いつまでも思い出される。

そう……最近の日本には「失敬な男」はたくさんいるけれど、「いやあ、失敬したナ……失敬!」と言つてサマになる紳士はほんとうに居なくなりましたヨ……と、天国の市村先生にグチを申し上げたら、先生は、あの淡々とした風情で、ただ黙つて少しほ、えまれるのだろうか……。

中村 メイコ(なかむら・めいこ)氏 略歴

一九三四年、東京に生まれる。
ラジオに声優および歌手として幅広く活躍、テレビ進出に伴い、俳優、司会と活躍の場を広げ、一九六四年、第四回放送作家協会賞女性演技者賞、八三年、第三十四回NHK放送文化賞を受賞。
著書に「いい女になるための自分育ての12章」「メイコとカンナのがんばれ!お年寄り」「あなたの魅力をひきだす自分育ての恋愛論」等がある。